

<報告>

幼年文学に関する研究

— 子どものことばの育ちにおける幼年文学の役割を中心に —

Research on Early Childhood Literature

— Focusing on the Role of Early Childhood Literature in the Development of Children's Language —

八幡 真由美

YAHATA Mayumi

本研究では、幼年文学について子どものことばの育ちにおける役割を中心に考察した。幼年文学は安心できる身近な存在である保育者が読み聞かせを行うことより楽しむ意欲が生まれ、保育者が幼年文学の世界を子どもと共感したり、子どもの質問に答えたり、一緒に考えたりすることができ、子どもの「聞く力」を育むことができる重要な役割を担っていると言える。また、幼年文学は小学校の国語の教科書と同様に縦書きであることが多く、幼年文学を大人と一緒に読みながら縦書きに馴染んでおくことは小学校以降の学習にスムーズに移行できると考える。

キーワード：幼年文学、子どものことばの発達、聞く力、児童文化財、小学校との接続

1. 目的

幼年文学は幼い子どもを対象とした文学や物語である。幼年文学の作品は、絵本から普通の本へ移行する段階に位置していて、読者が今後、長めの児童文学作品にスムーズに親しんでいけるかどうかを決めるファクターとなる（川端, 2013）。幼年文学は子どもにとって重要な児童文化財であるが、幼年文学の保育における効用に関する先行研究は少ない。

そこで、本稿では、保育現場における幼年文学の活用について考察を行うとともに、子どもの言葉の育ちにおける幼年文学の役割を明確化することを目的とする。

2. 研究方法

- (1) 幼年文学の歴史等からその特徴を明らかにする。
- (2) 保育現場における幼年文学の活用について考察し、子どものことばの育ちにおける幼年文学の役割を明確化する。

3. 分析結果と考察

(1) 幼年文学の特徴

日本の児童文学の歴史の中で、「幼年」という語が用いられたのは明治期であるが、幼年文学史において重要なのは昭和に入り「幼年童話」というジャンルが

生まれたことである。幼年向けの雑誌に掲載された「短く抒情的な」作品群が幼年童話と呼ばれるようになり、1950年代後半には『ながいながいペンギンのはなし』のような長編作品が出版され、従来の幼年文学の概念が崩された。これ以降、『いやいやえん』、『ちいさいモモちゃん』、『くまの子ウーフ』等、現代でも読み継がれている名作が次々と生まれた。

幼年文学の特徴として、昔話と同様の「行きて帰りし」の形が多いことが挙げられる。また、作品のテーマとして『くまの子ウーフ』等の動物を擬人化した作品、『エルマーの冒険』等のファンタジーの作品、『へんてこもりにいこうよ』等のことばあそびを多様化したナンセンス文学、『いやいやえん』等の保育園が舞台となっているもの、『ずるやすみばんざい』等の小学校が舞台となっているもの、『ちいさいモモちゃん』等の家庭を題材としたものが多い。

幼年文学は4、5歳児から小学校低学年までを対象とした子どもの文学である。幼年文学は、文字を読むことができない子どもも対象としているため、子どもが「自分で読む」文学ではなく、大人の読み聞かせを「耳で聞く」文学だと言える。子どもにも伝わる言葉が使われ、物語の構成も単純かつ簡潔であり、子どもと同年代の子どもや動物が主人公であることが多く、子どもが主人公と一体化して楽しむことができる。ま

た、読者にとっては「絵を見る」ことから「字を読むこと」への移行期でもあり、幼い子どもの発想、興味、期待を担うものとして、幼年文学の意味は非常に大きい（川端，2013）と言える。

(2) 子どものことばの育ちと幼年文学

保育現場において幼年文学を活用する際、以下の点に留意することが必要である。作品の選択は、子どもたちの年齢や発達、物語を理解できるかを考え、子どもたちの生活や経験に応じた内容を選択することが重要である。そのためには、保育者が子どもたちの日々の様子をよく観察し、子どもの興味や関心を理解し、子どもたちの発達に応じたものや理解できるものを選択することが大切となる。また、長編の作品の読み聞かせを行う場合は、一度に読むことをせず、毎日少しずつ読み聞かせをする等、読み聞かせの仕方を工夫すること等が求められる。読み聞かせを行う際は、子どもたちが落ち着いて集中して聞くことができる環境を設定し、明瞭な発音ではっきりと読むことが大切である。子どもたちが想像の世界を楽しめるよう、保育者自身が場面をイメージしながら物語の世界を壊さないように自然に丁寧に読む。また、子どもたちの表情や反応をよく観察しながら読む。保育者自身が読み聞かせを楽しんでいることが子どもたちに伝わると、子どもたちはさらに興味や関心を持つようになる。そのため、保育者自身が幼年文学の世界を楽しみ、子どもたちと共感することが求められる。

幼年文学は絵本や紙芝居と異なり絵による情報が少ない。そのため、子どもたちが読み聞かせを聞き、その内容を理解したり、物語の世界を想像したり、自分と重ね合わせたりしながら楽しむことになる。つまり、子どもの「聞く力」が育っていない場合、幼年文学の読み聞かせを「聞く」ことはできるが、内容を理解し、楽しむことが難しい。増田（2020）は幼児期に求められる「聞く力」は安心できる身近な大人との関係の中で、相手の言っている言葉を聞いて繰り返すことのできる力及び聞いたことを模倣する力を育むために聞いたり言ったりすることを楽しむ意欲を育てることの必要性とともに、見立てたり、疑問に思ったことを質問したりして多くの言葉を獲得するために、イメージしたものを言葉で置き換える経験を多く持たせたり、子どもの質問に答えたり一緒に考えたりすることの重要性を示唆している。このことから、幼年文学は、安心できる身近な存在である保育者が読み聞かせを行うことより楽しむ意欲が生まれ、保育者が幼年文学の世界

を子どもと共感したり、子どもの質問に答えたり、一緒に考えたりすることができ、子どもの「聞く力」を育むことができる重要な役割を担っているといえる。

また、絵本は縦書きのものもあるが、横書きのものが多い。幼年文学は小学校の国語の教科書と同様に縦書きのものが多い。幼年文学を大人と一緒に読みながら縦書きに馴染んでおくことは小学校以降の学習にスムーズに移行できると考えられる。

4. 今後の課題

実際に保育現場において、幼年文学がどのように活用されているかについて保育者に対する質問紙調査の実施、保育現場における幼年文学の読み聞かせの実際の観察を通して、保育における幼年文学の効用について研究を進めていきたい。

5. 成果

- (1) 研究発表「児童文化財の保育における効用に関する考察4—幼年文学を中心に—」日本保育学会第75回大会、オンライン開催（2022年5月14日・15日）。
- (2) 論文「児童文化財の保育における効用に関する考察Ⅳ—幼年文学を中心に—」総合人文学研究，2022，5号，pp. 1-9。

参考文献

- 川端有子（2013）児童文学の教科書，玉川大学出版。
 増田泉（2020）幼児期の言葉の発達を促す読み聞かせについて—小学校国語科における「聞く力」を高める指導を通して—，新島学園短期大学紀要，41，pp. 109-122。

本研究は2021年度国立音楽大学個人研究費（特別支給）の助成を受けた。